

## 東日本大震災における医療支援

著者	福田 みどり
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	117-119
発行年	2012-03-15
その他のタイトル	Medical support on the Tohoku-Pacific Ocean Earthquake
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/11937">http://hdl.handle.net/10076/11937</a>

# 東日本大震災における医療支援

福 田 みどり

## Medical support on the Tohoku-Pacific Ocean Earthquake

Midori FUKUDA

**Key Words:** Medical support, the Tohoku-Pacific Ocean Earthquake, Disaster Medical Assistance Team (DMAT), Disaster area from earthquake, Community center

東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

### はじめに

3月18日～3月23日、岩手県陸前高田市において被災地での災害医療支援に従事した。発災後1週間の段階で避難者総数30～40万人というまさに未曾有の大災害において経験した災害支援活動の実際について、振り返ってみたいと思う。

### 1. 発災～被災地へ出発

2011年3月11日午後、少し長い揺れを感じ、情報を得るためにテレビをつけた。そこに映し出される津波が押し寄せ、車や建物を飲み込んでいく様子に釘付けになった。

翌日、当院のDisaster Medical Assistance Team (DMAT)が出発し、数日後、活動を終えて戻ったスタッフから、「今後、長期に医療を支援する活動が必要となるだろう。」という話を伝え聞いた。

3月16日、病院長室に呼ばれ、三重県から岩手県への医療支援のメンバーとして医師2名、薬剤師1名とともに派遣されることが決定した。まず、DMATのスタッフの情報をもとに準備を始めたが、地域により、津波の被害に差があり医療設備等の状況も様々であることが予測されたため、物品のリストアップは困難であった。想定される医療に必要な医療材料や医薬品、生活用品や食料等の支援物品、自分達の食料や防

寒対策等多くの物品のなかで優先度を考え、また、災害時医療支援の基本である自己完結を想定し、現地調達はせず、すべて持ち込み、ゴミも含めてすべてを持ち帰ることを念頭に検討した。

3月17日、積み込めるだけの荷物を積み、具体的な支援先は未決定のまま岩手県庁を目指し、珍しく雪が舞うなか津市を出発した。

### 2. 被災地の概況

高速道路は通行止めであったが、緊急車両のみ通行が許可された。途中、地震の影響による段差や亀裂があり、時速40km制限や改修工事中の箇所もあった。また、3月中旬とはいえ、東北地方に近づくにつれ、雪が激しく舞ったり、ところどころ白く積もっていたりして、氷点下5℃という天気予報に寒さが懸念されたが、到着時には雪もやみ、青空が望めるようになった。

まず、岩手県庁で担当の方から県内の被害の概要や医療の状況等についての説明を受け、指示により陸前高田市を目指した。陸前高田市は岩手県内でも特に津波被害の大きい地域であった。これまでの道中で目にしたのは、電柱が傾いていたり、道路に亀裂があったりという地震の揺れによると思われる被害であったが、支援地域が近づくにつれ、息をのむような光景を目の当たりにする。津波により壊され、流された建物や樹木、車などが道路の両脇に山積み状態となり、自衛隊等によりかろうじて避難所に続く道路だけが確保されたような状況であった。(写真①②)

支援地域のライフラインに関しては、震災後7日目



写真1 壊滅状態の街並み



写真2 一部開通された道路



写真3 卓球台等を利用した診察室



写真4 診察のための物品、薬品の整理

に電気は復旧したものの水道やガス、燃料等は目処が立たない状況であり、被災者の食事として2回／日菓子パンやおにぎりやペットボトルの水が配給されていた。また通信手段は衛星携帯電話のみ（発災2週間後には一般の携帯電話が復旧）であり、情報収集の手段はラジオと電気復旧後はテレビによるものであった。そのため、近くの避難所や地域への情報伝達や情報収集は困難な状況であり、各避難所に行かなければ状況の把握をすることも、情報を伝えることもできなかった。24時間常に携帯電話やメールで連絡を取り合う日常からは、想像できない不便さや不安を感じた。

### 3. 活動内容

#### 1) 診療所

岩手県からの指示は、県立陸前高田病院のスタッフ（被災者）が避難先であるコミュニティセンターにおいて14日から診療所を開設している。設備や物品も十分ではない状況のなか、休みも取らずに診療を開始しているので、支援して欲しいというものであった。診療所に伺うとその日の診療は、ほぼ終了しており、病院長から被災時の状況や診療所に来られる患者の状

況について説明を受け、今後の支援活動について話し合いを行なった。

診療所の実際の活動は、既に開始されている診療介助を行いながら、より効率よく診療を行うため、器材等の配置や診療の流れを検討したり、不足物品等をリストアップし、続いて三重県から支援に来るメンバーへ衛生携帯を使って連絡をしたり、少人数であったがコミュニティセンターで避難生活をされている方で清拭・更衣等の日常生活援助が必要な方の介助を行ったりすることであった。

受診患者の多くは、高血圧等の慢性疾患やアレルギー疾患、ガレキ撤去時の外傷等で重症者はなかったが、津波により、常用内服薬をなくされた方など受診者数は連日100～150名で、コミュニティセンターは混雑していた。診療所開設にあたり、薬品や医療材料を近隣の施設等から調達されていたが、少ない種類（例えば、内服薬は降圧剤、血糖降下薬、安定剤、抗アレルギー剤等各1～2種類）のなかで工夫されており、持参した物品や薬品を提供、整理しながらの活動となった。（写真③④）水の供給が確保されておらず、医療材料の洗浄や消毒、滅菌ができないため、個包装・使い捨ての消毒薬や消毒セット、おしぼりタオル等是有

用であった。

すでに発災から1週間以上が経過していたが、受診される方やスタッフの多くが「仕方ないよね。」「私だけじゃない。みんな同じだから。」と発災時の状況についても明るく話されていたのが、印象的であった。その後日が経つにつれ、睡眠等について触れるとそれをきっかけに涙ぐみ、少しずつ自身の状況や思いを話されるようになった。

その後約4ヶ月間、三重県の各施設からこの診療所への支援活動が継続された。活動を終えた方々のお話を伺うと、被災地の環境や状況は変化し続け、それに伴って必要とされる支援活動や支援する側の準備や環境も大きく変化していた。

## 2) 避難所巡回診療

診療所での活動が中心であったが、道路の整備が来ていないこと、燃料の確保が困難であることから、コミュニティセンターの診療所を受診することができない患者が多いとの情報があり、他の支援チームと協力して避難所の巡回診療を実施した。各避難所はリーダーが決められており、その方を通して診療時間を伝え、定期的に臨時診療所を開設するような方法で実施した。巡回診療を受診される方の診療内容は、コミュニティセンターの診療所と同様であった。

毎日、診療終了後はコミュニティセンターにおいて、各避難所・診療所の状況について報告を行なった。巡回診療や岩手県内で支援活動を行なっている三重県の保健師からの情報により、同じ支援地域において活動している他県の保健師がいることがわかり、情報共有ができるようミーティングに参加していただくことになった。

避難所生活により、インフルエンザや感染性胃腸炎等の感染症の蔓延が懸念されたが、数件の疑い事例の報告（数ヶ所の避難所で1~2件/日程度）はあるものの流行を認めることはなかった。水道が使用できない状況ではあったが、擦式消毒剤やマスクを配布することにより、手指消毒やマスクの着用、飲料水を用いたうがい等の予防行動が積極的に行われており、また、一つ一つの避難所の規模が比較的小さかったことも感染症の蔓延を防ぐことにつながっていたと考えられる。

## 4. 活動を終えて

三重県に戻り、高速道路を降りると、その景色が被災地の光景と重なった。他のメンバーも同じ思いを抱いたようで、誰からともなく、「街の感じが似ているよね。」「もし、ここで同じようなことが起こったら。」と話しだした。その後数ヶ月間は、見慣れた景色に津波で流された道路や家々、建物などの被災地の様子が重なり、意識を他に向けるような努力が必要となった。また、暖かい部屋で入りたい時にお風呂に入り、食べたいものを食べ、暖かい布団で眠る当たり前の生活を有難いと感じるととともに、罪悪感のような思いを抱き続けていた。医療支援の活動をした仲間が少しずつ増え、思いを話し合うことで自分の気持ちを整理することができたように思う。

医療支援で自分に何が出来たのだろうと振り返っても、『自信をもって言えることは何もない』というのが、実感である。ただあの時期に活動を行なったことで、それぞれが被災者であり、なかには家族や友人が行方不明という状況のなかで休むことなく、医療者としての使命を果たし続けていた病院職員の方々の役割を引継ぐことができた。職員の方々が各々の震災後の対応や今後の医療活動の準備を行うための支援の一部はできたのではないかと思う。数ヶ月後、一緒に活動していた被災地の病院職員の方から頂いた手紙を読み、支援に行ってよかったと初めて思うことができた。

## おわりに

東海地方でも数年以内に大地震が起こるといわれている。もし、三重県で大地震や大津波が起こったら、まず、すべきことは何か。誰が指示・統括を行うのか。情報収集・伝達の手段やルートはどうするのか。物品の在庫はどれくらい、どこにあり、どのように供給されるのか。自治体・各施設等で組織としての体制や物品の備えはなされてきているとは思いますが、状況は刻々変化し、その時期に応じた対応が必要となる。より具体的に様々な想定における災害訓練等を行い、各個人が行動できるような備えが必要であることを改めて感じている。

キーワード：医療支援、東日本大震災、災害医療支援チーム、被災地、コミュニティセンター